

Title	書評：下田健太郎著『水俣の記憶を紡ぐ：響き合うモノと語りの歴史人類学』慶應義塾大学出版会、2017年
Sub Title	
Author	笠井, 賢紀(Kasai, Yoshinori)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.104- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：下田健太郎著

『水俣の記憶を紡ぐ——響き合うモノと語りの歴史人類学』

慶應義塾大学出版会、2017 年

笠井 賢紀

似たようでありながらばらばらである繊維を縫ることで糸という一つの新たな形を生む行為を「紡ぐ」という。一人ひとりの、あるいはそれぞれの社会の記憶のあり方は似たようでありながら、やはりばらばらである。それでも「水俣の記憶」という一つの形は現に生まれ紡がれてきた。それは大文字の歴史としてではないし、完結した歴史としてでもない。丁寧に紐解けば構成している一つひとつの記憶が形を変えながらも残っている。著者が「紡ぐ」に込めた思いは正確にはわからないが、「響き合う」という学術書にはややめずらしい副題と相俟って、——特に、「語りから未来を紡ぐ」という科目を開いている評者としては——読む前から想像を促される書名である。

本書は、下田健太郎氏が 2015 年度に慶應義塾大学に提出した博士論文「水俣病経験の想起をめぐる歴史人類学——響き合うモノと語りの通時的分析を通して」に加筆修正を行ったものであり、慶應義塾大学出版会より 2017 年に出版された。

本書の目的は、水俣病の被害者有志グループ「本願の会」を中心に、水俣病経験が想起され記憶が紡がれていくさまを歴史人類学の視点から明らかにすることである。「水俣病をめぐる過去」は過ぎ去った過去ではなく、現在も継続するものとして経験され、一元的な歴史化に今なお人々は抗し続けているという。著者はそのような水俣というフィールドに入り調査を行ってきた。

本書の構成について簡単に紹介する。序章では、本書の目的や射程が明らかにされ、いくつかの理論的枠組みが導入される。特に、本書は「本願の会」が制作してきた石像を中心的に扱うわけだが、モノを現実の表象として見るのではなく、モノが構成する現実を直視するという視座を示していることが重要である。第 1 章では、水俣という地域が経た近代化だけではなく、水俣研究の歩みについても整理されている。近年の水俣研究が、「史実としての歴史」に一定の距離をもち歴史構築という問題領域に関心が広がっているものの、著者のようにモノのもつ歴史構築のための媒体性が取り上げられていないことが述べられ、本書の研究上の位置づけが明確化されている。

第 2 章では、歴史構築をめぐる多様な集団間の絡み合いが、3 期にわけられて読み解かれていく。水俣湾の埋め立てをめぐる多様な立場が見られた第 1 期に続き、「水俣病を克服した新たな出発」が意識され埋立地活用をめぐる対話が見られたのが第 2 期であった。第 3 期は、実際

に埋立地が完成してから地域再生事業が行われていた期間で、埋立地活用をめぐる新たな対立が顕在化した時期とされる。制度的救済の行きづまりを受け、心情的側面の救済が埋立地活用と連節されるのが第3期の特徴である。また、同章では、本書における主要なアクターである「本願の会」について、設立の経緯や活動内容が紹介されている。

第3章では、「本願の会」が制作した石像52体の形態と空間的配置に関し、調査結果の整理と経時的变化についての分析が行われる。石像は、地蔵や神仏といった典型的な形態がありつつ、そこからの「ズラシ」が特徴としてみられる。石像は第2章で扱われた埋立地で海を向いて設置されていき景観を形成するが、ズラシ等による形態の多様化が起こる際——景観の更新の際——には既存の石像との関係性が意識されていたことが分析から明らかにされる。この関係性への意識は、石像の建立が個々人の記憶を水俣の歴史の束に加えていこうとする実践であることを示唆する。

第4章は、同じ「本願の会」で結成時から主要なメンバーであったO氏のライフストーリーが事例となる。作り手の語りにおける想起に、モノである石像が可能性を提供したり制限したりする。その分析を通じて、人とモノ（石像）とは連鎖的で継起的な関係を有しており、主客の図式では表せない両者の往復運動があることが示される。石像は埋立地で景観の一部となり、作り手やその他の作り手に新たな行為の可能性を提供し続けるという。

第5章は、「本願の会」で水俣病をめぐる運動・裁判に積極的にはかかわらなかった2人のメンバー、J氏とA氏が事例となり、石像のモノとしての性質が記憶のあり方にどのような影響を及ぼしてきたかが考察され、三つの結論が導かれる。すなわち、(1)石像の持続性は語りを方向づける、(2)石像の変化が石像と結びついたイメージの変容を導く場合がある、(3)埋立地景観と複合的に作用するという石像の特性は経験だけではなく未来を想起させる効果をもつ。

終章が本書のまとめを担っている。モノが人びとに何かを想起させるプロセスを「モノと語りの響き合い」としたとき、その響き合いのなかで多層的・多元的な現実として想起されてきている未完結の「水俣病経験」が存在することが本書を通じて示唆される。著者はここで「モノ」を *object, thing, material* の概念区別ではなく、より包括的な概念としての日本語の「もの (mono)」概念に着目し、「もの」の移ろいを記述しうる歴史人類学を展望しつつ、本書を終える。

本書は著者が10年のうちに26カ月行ったというフィールドワークによって集められた、「本願の会」メンバーを中心とする関係者の語りや史資料という豊かな素材に支えられている。著者は、これらの素材を本文や註で必要に応じて適切に提供しており、用いられなかった素材も十分整理されているであろうと思わせる。語りを本文で扱う際には、特段の説明はないが会話分析の知見も生かして細やかな検討が行われている。加えて、第1章の地図、第2章の文書の類別、第3章の石像の類別と分布の空間的把握・表現など、各章において明らかにすべきことに適合した異なる手法を使い分けている点も秀逸である。

本書にはいくつもの時間の流れがある。一つには、年表的に把握できる一般的な時間の流れ

である。次に、一人ひとりの人生の時間である。この二つの時間における歴史、すなわち社会史と個人史とをともに扱い、その関係性も論ずる手法には、社会学においても生活史法の蓄積があり、本書でも同様である。さらに時間の流れが生じるのは、社会史も個人史も変容していくためである。この変容は、新しい時間が加わることによってだけでなく、過去のできごとの位置づけが変わることによっても起こる。たとえば、水俣病が公害と認定される前と後とでは、起きていた事象は同一でも社会史における扱いは大きく異なる。個人史の過去にかんする語りも同様に、語り時点(現在)によって異なるため本書が「語り直し」という歴史実践に注目したことは十分に理解できる。

流れていく個人史の時間の中で、記録・文字化されたいくつかの語りでは、<個人史と社会史との関係性>がスナップショットのように保存されているイメージを評者ももった。本書は、著者自身による聞き取りや収集した資料によって多数のスナップショットが示され、その変遷を共に辿る旅でもある。そのように理解したとき、もう一つの時間の流れがあることに気がつく。それは、スナップショットを読み解く者がもつ、やや特異な時間の流れ、あるいは経験の蓄積である。スナップショットを読み解く著者の視点自体が、時間の流れによって変化する。さらに本書自体が、ある時点におけるある語りのスナップショットであるから、著者らによる未来の著作との比較検討が予期される。

最後に、2点の課題を挙げる。ここで課題というのは本書によって評者に惹起された、評者や読者が今後考えていくべき論点である。とはいえ、著者自身がもっとも考えてきたことばかりだろうと思われるので、いつか著者の応答も何らかの「相対」の形でうかがいたい。

第1点は、語りの主題についてである。本書において語りの主題は水俣病、あるいは水俣病を経験した水俣という地域とそこに生きる人たちである。そのため、紹介されている語りは、水俣病のこと、死生観に連なること、地域の過去の生業や風景のことが主となる。「水俣湾埋め立て地で石像を前にする経験が、言語化し得ない心情をも想起させる」ならば、語りが水俣病という文脈への強い依存性を持つのはやむを得ないことかもしれない。しかし、「水俣の記憶」といったとき、あるいは、「生活世界に存在するさまざまな「もの」」に着目するとき、水俣病という強い文脈によって後景化していった語りはどのようなものだったのか知りたいと思う。水俣で生きること、水俣の記憶を語ることのすべては水俣病と直接に関係せざるを得ないのだろうか。もしそこに、水俣病とは関わりをもたずに語られることがあるなら、どのようにしてそれは可能なのだろうか。もしあらゆることが水俣病と関連づけてしか語れないのであれば、それはなぜなのだろうか。石像が表現を促した語りの中に、本書では取り上げられなかったどのような水俣の生活世界があったのか。

第2点は、著者の透明性についてである。本書の随所で語りで紹介される度、必ずしも著者自身はトランスクリプトに登場しないものの、長年のフィールドワークを行い、一定の関係性を有している著者だからこそ導かれていると思われる部分がある。本書では、著者と調査対象者との関係性についてほとんど言及がなく、著者が無色透明であるかのような錯覚を受ける。

しかし、「顔」の見える人間と出会いたいという希求、すなわち「相對」が一つのキーワードである本研究において、著者はまさに「相對」の関係性を「本願の会」メンバーらと結んだのではないだろうか。著者は、「特定の時点から個人史を再構成するのではなく、さまざまな時点で発せられた語りをその文脈に留意しながら比較考察すること」の手法としての有効性を説いている。だからこそ、彼らの人生に実に10年にも及び会いに来て語りに耳を傾け、さまざまな時点の語りを比較考察できる特異な立場にある調査者である自身が、自身の研究対象に組み込まれている再帰的状况について論じることが必要だろう。

(かさい よしのり 龍谷大学)